

2003年10月9日
経済産業省大臣官房参事官
関 成孝

IPCC 第二回スコーピング会合（9月1-4日、独：ポツダム）結果概要

I. 第二回スコーピング会合とは

IPCC 第4次報告書（2007年完成予定）の骨子案を作成するための専門家会合。IPCCが招待した約150名の専門家及びビュローメンバー参加。3つの作業部会（WG1: 科学的根拠、WG2: 影響と適応及び脆弱性、WG3: 緩和措置）に分かれ、第一回スコーピング会合（4月）で作成された骨子案をベースに、7つの横断的課題（後述）の取り扱いを議論し、骨子に反映させる作業を行った。

わが国からは、地球フロンティア研究システム松野氏（WG1）、国立環境研究所原沢氏（WG2）、新日鉄岡崎氏（WG3）、関環境担当参事官（WG3）、IGES 平石氏（ビュロー）、環境省高橋室長（ビュロー補佐）が参加した¹。

今回の骨子案は、第21回IPCCパネル総会（11月3-7日、ウィーン）に提出され検討される。同総会で骨子を最終的に決定し、執筆者の人選作業に入る。執筆者の選定は来年春までに終了する予定。

II. 議論のポイント

(1) 横断的課題の取り扱い方

横断的課題については、当初、統合報告書を取りまとめる段階で新たに纏めなおす、あるいは、別途のペーパー（テクニカルペーパー）とするなどのアイデアがあった（第20回IPCC会合、及び第一回スコーピング会合）。しかし、今次会合では、作業グループ間の連携を確保しつつそれぞれの作業グループ報告の中に取り込む方向での整理が行われた。横断的課題それぞれについて出されたペーパーはWGでの作業にガイダンスを与えるとの位置づけ。

(2) 個別横断的課題の取り扱い方

ア) 不確実性とリスク

¹ 9月4日に逝去された国環研の森田氏も招待（WG3S）されていた。

WG間相互の関連を含めて、それぞれのWGの報告の中で議論。

イ) 地域問題

地域問題に焦点を当てることは強く意識されているが、WG 1 - 3における地域の括り方はそれぞれの問題意識に合わせたものとなっている。例えば、WG 1は地球規模での気象学的な括りに、WG 2は海岸線、島嶼、低地といった気候変化の影響するセクターの分析と、各大陸・極地等という切り口での分析を、また、WG 3は開発の度合いなどを尺度として地域の視点を考慮するというアプローチが取られている。

ウ) 水

水資源への影響はWG 2で、水資源管理政策と緩和措置との関係はWG 3で対応。

エ) 主要な脆弱性

主としてWG 2で検討。WG 3では、枠組み及び長期的シナリオの分析の中で検討。

オ) 緩和措置と適応の関係

WG 2、WG 3それぞれで検討。WG 3においては、長期的シナリオに加えて個別セクター毎の分析においても検討する。

カ) 持続的成長

WG 3において本件を扱う独立の章を立てる。気候変動関連政策と持続可能な成長のための政策のシナジーやトレードオフを議論する。

キ) 技術

ハードウェアとしての技術にとどまらず、ソフト・インフラを含めて技術を分析する。観測技術についてはすべてのWGで、適応関連はWG 2、緩和関連はWG 3にて扱う。産業技術とその開発・普及・技術移転に焦点を当てる。

(3) UNFCCCで求められる国別報告の扱い

UNFCCCの各国報告は、有益な情報源のひとつとなるとの位置づけ。

III. 第三作業部会関連の主要なポイント

マクロモデルによるアプローチとセクター別の積み上げで対策コストや潜在性が見通しなどが異なることが意識され（マクロアプローチではコストが低めにでる）その比較分析が明示的に盛り込まれた。

経済インストラメントに留まらず産業界の自主行動計画を含むさまざまな緩和対策が分析の対象となっている。

技術について焦点が当てられ、その潜在性、コスト、障害、技術開発、普及、移転の課題などが分析される。

国内政策と国際的枠組みの関係（国際的な枠組みが国内政策に及ぼす影響など）がきちんと議論される。

貿易やエネルギー安全保障など他の政策との関連も分析される。

IV. 今後のプロセス他

今次会合で議論された骨子案は、スコーピング会合参加者との間のフィードバックを経た上で、11月3-7日にウィーンで開催される第21回 IPCC 政府間パネルに提出される。同会期中（4-5日）に行ごとに合意をつくり、6-7日に骨子案を採択する。

パネル会合後直ちに執筆者のノミネーションに入り、推薦は年内に締め切る。選定作業は2004年3-4月頃終了を目処とする。同年、第2-3四半期に執筆者の会合を開催する。なお、今次会合でそれぞれのWGに対して、現時点での日本の執筆者候補者リストをインフォーマルなものとして手交した。